

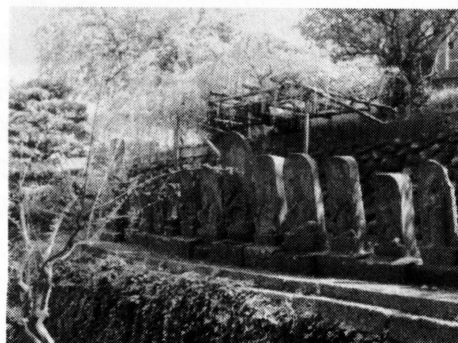
その3 高津と八千代市内の女人信仰に関わる石造物の変遷

藤 由美

1 高津の十九夜塔

高津山観音寺の本堂の右手、ひととき高い水子地藏の右奥の崖のテラス状の場所に藤棚がありその下に、高津の子安講が建立した十九夜塔などの供養塔が14基ずらりと並んでいる。(写真1・表)

「十九夜塔」とは月待塔のひとつで、特定の月齢の晩に当番の家に集まり、飲食・会話をしながら月の出を待つ「十九夜講」が建てた記念の供養碑で、如意輪観音を守り本尊とし、女人救済と子安祈願を目的とした。当研究会の石造物調査では、銘文に「十九夜」の文字が記されている石塔を「十九夜塔」、それ以外の、たとえば「女人講中」などの銘文では「供養塔」と区別しているが、高津で「女人講」とは現在の「子安講」のことであり、今も毎月19日に開かれていることから「十九夜講」と同意である。



1 高津の十九夜塔

高津の十九夜塔一覧

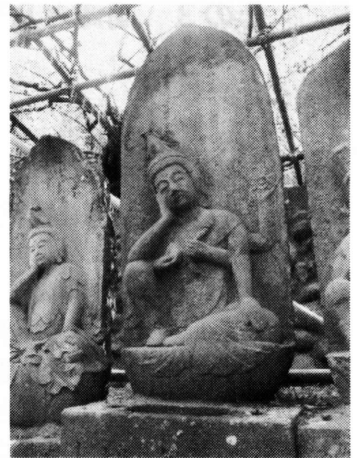
石造物No. は「史談八千代」29号データのNo.

	石造物No.	造立年	西暦	間隔年	目的	像容	寄進者名
1	18	延宝2	1674		十九夜塔	如意輪	十九夜講中 高津村施主敬白 (女人名51名連記)
2	17	正徳3	1713	39	供養塔	如意輪	結縁女四十箇
3	20	明和6	1769	56	供養塔	如意輪	
4	16	文化8	1811	42	十九夜塔	如意輪	女人講中
5	21	弘化2	1845	34	供養塔	如意輪	女人講中
6	19	安政5	1858	13	供養塔	如意輪	女講中
7	22	明治6	1873	15	供養塔	如意輪	女講中 高津村鈴木太郎兵衛他
8	15	明治19	1886	13	供養塔	如意輪	女人講中 セハ人鈴木太郎兵エ・石井新兵エ
9	14	明治24	1891	5	子安塔	子安観音	女人講中 鈴木太兵エ・石井新兵エ
10	13	明治33	1900	9	子安塔	子安観音	女人講中 鈴木太郎兵エ・石井和五郎
11	24	昭和2	1927	27	子安塔	子安観音	世話人鈴木太七 石井朝太郎
12	11	昭和25	1950	23	子安塔	子安観音	女人講中 セ話人 岩井佐助 鈴木太郎吉
13	10	昭和57	1982	32	供養塔	聖観音	高津女人講中 女人講中
14	12	(大正頃か?)		不明	子安塔	子安観音	

〈八千代市内最古の「十九夜塔」〉

14基の塔のうち、一番大きくひとときわりっぱなのは、真ん中の延宝2年(1674)の十九夜塔である。(写真2)像容は、舟型光背に六臂の如意輪観音像、台座に「十九夜講中」

正面に「下総国葛飾郡二宮庄 奉 造立観音石像依□
徳現世安穩及 至後生安樂思往生不可有疑者也 高津
村施主敬白」、さらに、この像の丸みがかった衣の裾と
蓮華座に模様のように「おつる・おみや・おまめ」な
どひらがなの女性名がびっしり彫られている。結願し
た女人名であるが、女性の俗名というのは珍しい。密
教系像容の儀軌である六臂の威厳ある姿で、村の女性
たちがひとりひとり、現世のみならず来世での救済を
切実に祈願した信仰が伝わってくる。明らかに「十九
夜塔」あるいは女人講の供養塔と認識できる石塔とし
て、この石塔は八千代市内最古でもあり、市の文化財
相当の石仏といえるだろう。(資料に銘文を収録)



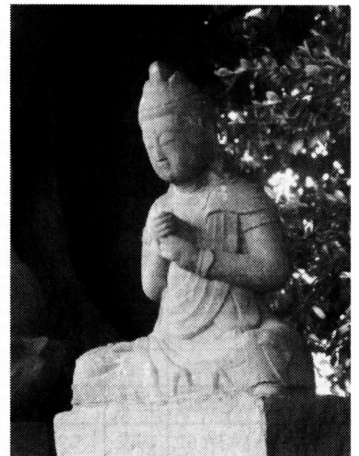
2 延宝2年十九夜塔
(左は正徳3年銘)

近隣での先行する像容の類型としては、佐倉市臼井
台実蔵院の寛文9年(1669)の十九夜塔があるが、願
文と蓮華座の寄進者銘から、まだ女人と限定しない時期の男女の講の建立で、まだ十九
夜塔が女人講と限定されない時期の塔と推測される。

延宝2年十九夜塔の右は、正徳3年(1713)銘の二臂の如意輪観音供養塔で、首を
傾けて深い思惟を表している姿は美しく、「史談八千代」29号表紙にもその写真を使わ
せていただいた。銘文は「奉造立□□□菩薩願成就処 結衆女四十箇」。六臂の延宝2
年塔に比べ自然な姿で、神仏というよりヒューマンな深い知性と慈愛が感じられるが、
この如意輪観音像の作風は、高津梵天塚の大日如来像(写真3)の哲学的な美しさに合
い通じるものがあり、このような優れた作品を残した石工の系譜をぜひ知りたいもので
ある。

以下、明和6年(1769)の如意輪観音供養塔、文化
8年(1811)の如意輪観音十九夜塔、弘化2年(1845)
の如意輪観音供養塔、安政5年(1858)の如意輪観音
供養塔と江戸期の石仏6基が並ぶ。造立年の間隔は、弘
化2年までが34～56年、安政5年が13年目となる。

明治以降は、明治6年(1873)、明治19年(1886)
の如意輪観音供養塔2基。石材の質ももろくなり、ま
た首が立ち右手が頬をおさえているかっこうで、思惟を
表すため首を左に傾けているということの意味は忘れら
れているようだ。またこれ以降は「女人講」銘とともに、
村の世話人屋号、または氏名(男性名)が昭和25年ま
で記されるようになる。



3 高津梵天塚の大日如来像

〈子安観音像への変化〉

像容が、如意輪観音から離れ、子供を抱いた「子安観音」像となるのは、高津の場
合、近代に入ってからである。明治24年(1891)の子安塔(写真4)が初出で、以後、

明治33年(1900)、昭和2年(1927)、昭和25年(1950)と続く。剥落が著しく建立年が不明な子安観音像が1基あるが、像容からおそらく明治末から大正期の建立と思われる。安政5年から昭和25年までの建立年の間隔は、5～23年である。

最後は、昭和57年(1982)の正観音像で、寄進者銘は「高津女人講中」。世話人の名前はない。昭和25年から、数えて33年後になるので、この塔を建立する際に、御姿を変えて衆生を救済する観音の三十三応身にちなんで「33年毎に建立」のいわれが成立したといえる。

正観音像を建立したころは、出産と子育てが女性の最大の課題であった時代は遠くなり、その翌々年の昭和59年、水子地蔵像(写真5)が子安講その他大勢の寄進で完成すると、子安講の参加者はこの地蔵像に香華を手向け、この世に生をうけることのなかった小さな霊に祈るのが常となっている。この水子地蔵の下納骨堂の壁面には、旧村の内外の多数の個人名のほか、高津の子安講とその世話人、畑の子安講の世話人も名を連ねている。

〈「子安大明神」「妙正大明神」の石祠〉

その他、子安講とは関連しないが、路傍の石造物として、妙見神社に通じる道の角に文化9(1812)年銘の「子安大明神」と文化7年(1810)銘の「妙正大明神」も石祠と、小さな釈迦像が並んでいて、「こやすさま」と称されている。(写真6)

年末に清掃と注連縄張りをしているキュウベ家のおばあさんに石祠のいわれなどをお聞きしても、前にお世話していたサブロー家のおばあさんが亡くなられ、お世話を引き継いだけで、詳しいことはわからないとのこと。

「妙正大明神」とは日蓮宗系の疱瘡神で、市川市北方の池にすむ「龍神」が、女人の姿をして日蓮に皈依した奇談として市川市の龍経山妙正寺の宝暦3年(1753)の縁起に、記されている。さらに明暦年間(1645～1654)の疱瘡の大流行の際、車方の村人が妙正大明神を祀り、効能があったことから中山法華経寺領の八千代市北西部を含む村々に広がっていった。妙正寺は桜の霊場として知ら



4 明治の子安観音
(左は24年、中央は33年、右は造立不明)



5 昭和59年造立の水子地蔵



6 「子安大明神」「妙正大明神」の石祠

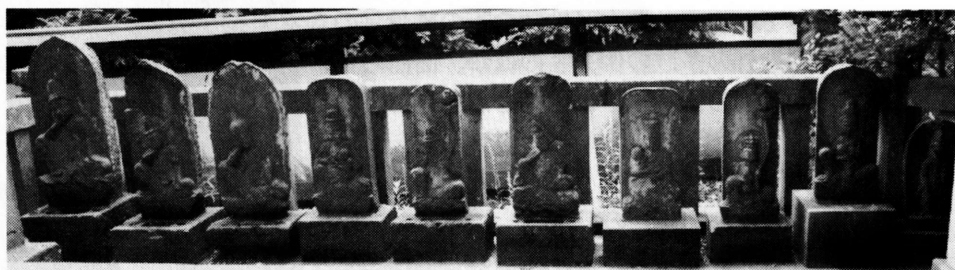
れ、桜の樹皮が疱瘡の解熱に効能があるなどの背景や、また「龍神」とはすなわち「姥神」でもあることなどから、疱瘡神と子安神をセットで祀られても不思議はないが、高津には日蓮宗の寺はない。私は日蓮宗の家から高津に嫁入りした人が実家の宗旨で建立したのではないかと推察するが、実態は不明である。

2 八千代市域と近隣旧村の女人信仰の石造物およびその変遷

ところで、十九夜講の供養塔が如意輪観音像から子安観音へと像容が変化するのは、高津では明治中期からであるが、一般的には何時ごろ、どういうプロセスで変わるのであろうか。近隣の旧村のうち、千葉市花島と市内勝田と大和田の女人講の供養塔群を調べてみた。

〈花島と勝田、大和田の十九夜塔群〉

花島の十九夜塔群は、花島観音境内の山門右手にある。正徳2年（1712）、元文3年（1738）、延享4年（1747）、文政5年（1822）までが如意輪観音の十九夜塔である。以後、嘉永3年（1850）から、赤子に乳を含ませる子安観音像となり、明治5年（1872）、明治15年（1882）、明治28年（1895）、昭和6年（1931）の全てが子安観音像である。（写真7）



7 花島の十九夜塔群

勝田では円福寺に江戸期の天明8年（1788）、享和3年（1806）の十九夜塔があるが、明治33年（1900）から平成9年（1997）まで、近代らしい年不詳の1基を含む9基の全てが子安観音像である。（写真8）



8 勝田の円福寺の十九夜塔群

大和田の円光院では宝永5年（1708）、延享元年（1744）、明和9年（1772）、文化15年（1818）まで4基が如意輪観音像で、嘉永元年（1848）、文久15年（1848）の2基が子安観音像、明治18年（1885）以後は、昭和4年（1929）まで4基の子安観音像を造立、昭和32年（1957）は小さな子安観音像と講員の氏

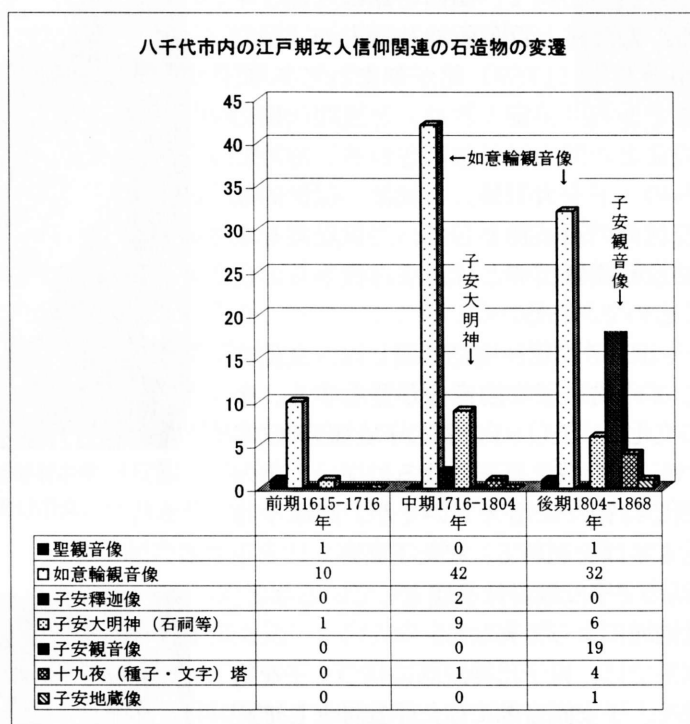


9 大和田の円光院の十九夜塔

名を陰刻した石碑を建てている。

〈市内全域の江戸期石造物〉

『八千代市内の石造物 - 江戸期 - 』のリストを Excel に入力したデータから、造立年の明らかな女人信仰に関わる石造物 128 基を選び出し、江戸時代を 3 期に分け調べてみることにした。(グラフ参照)



江戸前期 (1615 ~ 1716 元和～正徳年間) までの十九夜塔は、高津村の 2 基を含む光背型の如意輪観音像 10 基と吉橋寺台の正観音像 1 基で、石材の質や彫像の技術も高く、「二世安楽」や「念仏」などの銘文があり、仏教的な救済を如意輪観音に求める信仰をよく表している。

江戸中期 (1716 ~ 1804 享保～享和年間) も前期に引き続き、光背型の如意輪観音像の造立が 42 基と盛んである。この時期の十九夜塔の珍しい石造物としては、宝暦 13 年 (1763) 建立された萱田長福寺の層塔がある。銘は「奉造立地藏尊奉供養十九夜講中当村善女人」で、女人救済を地藏尊に求めていることも注目される。(写真 10)



10 萱田町長福寺の層塔

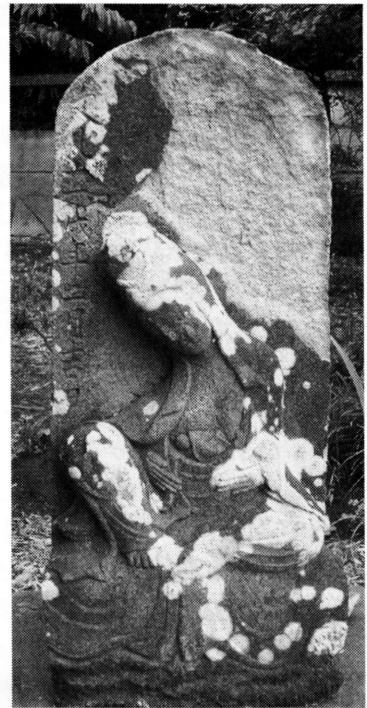
一方、中山法華経寺旧神保領であった日蓮宗傘下の島田村では元文2年(1737)と寛政13年(1801)に子供を抱いた「子安釈迦像」が建立される。

また神道系の「子安大明神」銘の石祠が、前期は1基だったが、中期は9基と増えてくる。前期の石祠は、「史談八千代」第26号で報告されている上高野の子安神社の社内の石祠で、側面の銘は元禄3年(1703)である。また村上百余所神社境内の「子安大明神」には宝暦9年(1759)銘が刻まれてあり、富士塚にあることから「子安大明神」と浅間信仰の木花佐久耶毘売命との関わりが推測される。神社に祭られるこれらの「子安大明神」石祠は、現世的な利益を祈る子安信仰の石造物として、二世安樂を求める密教系の如意輪観音信仰とは別な古代からの信仰の系譜をひくものであろう。

後期(1804～1867文化～慶応年間)は、文化文政期に突如として市内に子安観音像が登場する。米本林照寺境内の文化11年(1814)銘の子安観音像(写真11)が初出で、その数は幕末になるに従い、市内北西部や街道筋では徐々に増えていくが、高津や勝田などでは明治も半ばを過ぎて、また下高野では大正2年(1913)で初めて子安観音像を建立しているなど、その受容時期は地域によって異なる。

なお、日蓮宗系では、鬼子母神説話に基づく子を抱いた訶梨帝母像を、子安観音像に似た子安神として祀るが、その事例を萱田町長妙寺の子安鬼子母神像に見ることができる。水子の霊を供養する現代の慈母観音像の横に子安像が3基あるが、嘉永2年(1849)建立の像(写真12)は、懷に子を抱き左手にざくろの実(枝)を持つ子安型の鬼子母神座像で、台石に「女人講中」のほか講の女性の名も記されている。鬼子母神像には合掌した鬼型もあるが、日蓮宗地域の女人講では子安型の訶梨帝母石像が一般的のようで、近代の建立では長妙寺の明治16年(1883)像のように右手に蓮を持ち如意輪系の子安観音とその像容の区別がつかないものもある。もう1基は昭和39年(1964)の造立。これも「子安鬼子母神」と刻されていないければ、一見子安観音像のようである。

この嘉永2年の子安鬼子母神像1例を含め、グラ



11 米本林照寺境内の
文化11年銘の子安観音



12 萱田町長妙寺の子安鬼子母神像

フ2のように、市内には幕末までに建立された19基の女人が子供を抱く子安像が現存している。

3 子安観音像の像容成立の背景をさぐる

男性中心の世界観の仏教では、観世音菩薩は明らかに男性であり、江戸時代になるまで日本では赤子を抱く観音像はなかった。江戸中～後期における子安観音像の像容成立のプロセスは現在よくわかっていないが、私が見聞きした範囲で、子安観音像の像容成立の背景を考察してみたい。

二十六聖人記念館の結城了悟館長のご教示によれば、鎖国になる頃、長崎港に福建省から白磁の子供を抱いた白衣観音像がもたらされた。白衣観音は清浄菩提心を表し、諸観音を生み出す母と考えられ、その柔和な姿は仏教徒のみならず、初期は西日本に多かった潜伏キリシタンにも聖母像の代用をして受け容れられた。今も長崎と大村藩の寺々にはそのような観音像がまつられているが、キリシタンの子孫の家から「マリア観音」として発見されることもある。やがて平戸焼きのより柔和な、慈愛満ちた母子像に近い観音像が造られ、日本中に普及したという。この作例のいくつかを、私も国立東京博物館でキリシタン取締りの際の幕府押収品としてみたことがある。(写真13)



13 白衣観音（重文）

国立東京博物館

関東・南東北近辺の子安観音の石仏としては、小林剛三「郡山地方の子安信仰塔」挿図に、左足を半伽にして首を傾け、あるいは片手に蓮華をもった「如意輪観音に子を抱かせた像」と、「如意輪観音像から変化したとは考えられない像」の絵が載っている。後者について、著者は述べていないが、頭から布を被って肌を表さず子を抱くその像容は、おそらく江戸初期のこの子供を抱いた白衣観音像の系譜を引くのではないかと、私は推測している。

高津と八千代市内の女人信仰に関連する石造物を総括すると、江戸時代前期は、十九夜の月待講に結集する女人たちが「二世」、即ち来世と現世での救済を如意輪観音に念仏し、その供養塔として十九夜塔に如意輪観音を刻んだ。この像容の塔はその後近代に至るまで盛んに造り続けられる。

また中期からは、仏教的な月待講とは別に、神道系の「子安大明神」銘の石祠が現れるが、その背景には、古来から性に関連する呪物（二股大根・うば石・石棒など）を道の境に祀る風習や、浅間信仰など修験宗教系に由来するさまざまな子安神信仰を伺うことができる。

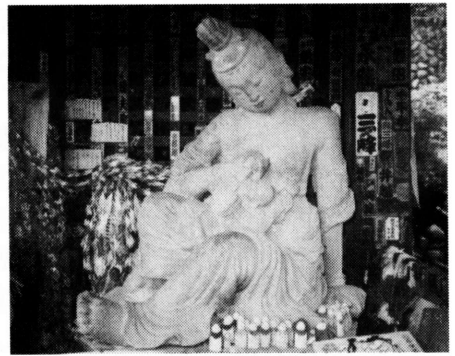
日蓮宗系に多い子安神像は、ハーリティ（訶梨帝母）は他人の子供を奪って食べてしまう鬼神だったが、釈迦が彼女の末子を隠して子を失う母の悲しみを悟らせたことから、仏教に帰依して子供の守り神となったという鬼子母神説話（「雑宝蔵経」）に由来し、この説話は密教とともに日本に伝えられ、平安後期には安産祈願の修法が盛んに行われたという。この訶梨帝母が天女の姿で右手に柘榴（吉祥果）をもち、子を抱いた像としては、鎌倉時代の滋賀県園城寺蔵の訶梨帝母座像（重要文化財）など優れた彫刻例がある。

八千代市島田の子安釈迦像は、他に作例が少ないのでその由来が定かでないが、釈迦

が子を抱くというのも、鬼子母神説話の子を守る釈迦になぞらえたものであろう。

那須の温泉神社の宝暦12年(1762)の十九夜塔は、如意輪観音が袈裟の中に赤子を抱く姿という。『石の宗教』また、さいたま市大間木の墓地には、赤子を抱く丸彫りの子育て観音が、明和4・5年(1767、1768)銘の墓塔がみられる。『石の文化財 - 浦和の石造物 -』

寛政4年(1792)、秩父四番札所の金昌寺では、「マリア観音」と後世俗称された美しくも大胆な子安観音像(写真14)が奉納され、近隣では佐倉城下の鐺木の周徳院の子安観音(通称「子育て地藏」)が寛政6年(1794)に建立された。



14 寛政4年の秩父四番札所
金昌寺の子安観音像

女人講の如意輪観音像が子安観音像に変化する背景として、現世利益の神道系の「子安大明神」の石祠の流布を背景に、子供を抱いた白衣観音像、または訶梨帝母座像からの影響などが考えられるが、決定的な事はわからない。

市内北西部の一部の地域では、江戸時代後期の文化文政のころ如意輪観音像が子安観音像に変るが、この現象は、印西町の調査でも同時期であり、石工の新しい像容への挑戦意欲や、秩父巡礼や地域の観音巡礼や大師講などを通じての地域の人々の動きにも規定されるであろう。榎本正三氏は天保天明の飢饉に際して横行した「子がえし」(間引き)に対する施政者側からの戒めと関与が強く働いた子育て勸奨の成果とも判断している。

江戸後期、如意輪観音像を建てていた各ムラの女人講も、明治・大正時代にはほとんど子安観音像を採用するようになり、その数も圧倒的に増える。女人講が文字通り、母性を象徴した現世的祈願の子安講に変わった近代の現象といえるだろう。

【資料】延宝二年造立十九夜塔の銘文

(上部舟形光背部)「下総国葛飾郡二宮庄 延寶二天 奉 造立観音石像薩依□徳現世安穩及 至後生安養思往生不可有疑者也 甲寅二月吉日 高津村施主敬白」

(石像下部・写真15)

妙桂	お□
春香	おは□
おまち	おかん
おいぬ	おくに
こ志まる	おはつ
お□い	おふく
おまん	おくら
おまち	おふく
お谷	おまつ
おい祢	お宮



おつる	おなつ
おみや	おたつ
おまめ	おえよ
想女子	
お長	おミヤ
おくら	おかつ
おまめ	お長
おせん	お松
おたけ	まんよ
およせ	およ欠
おせん	おま欠
お祢	お さ
おかま	おく□
おはる	おけ□
おま	お□
おなや	おたノ
おかめ	

(以上は滝口昭二・鈴木登・関和時男会員のご協力により解説したものである)

【参考文献】

(前章「高津の女人信仰の民俗－子安講・秩父参り・念仏講・観音堂のすがた－」の参考文献を含む、『史談八千代』は省略)

「金石文が語る女人信仰」1986 榎本正三 『印西町の歴史』第2号

「北総の子安塔とその背景」榎本正三

「郡山地方の子安信仰塔」小林剛三

『女人哀歓－利根川べりの女人信仰－』1992 榎本正三 崙書房

『八千代市の石造物－江戸期－』1986 佐野二郎

「八千代市下高野の十九夜講と十九夜塔」1994 川戸彰 『千葉文華』千葉県文化財保護協会

『八千代市の仏像』1987 八千代市文化財総合調査団

『石の宗教』1988 五来重 角川選書

『石の文化財－浦和の石造物－』1996 浦和市教育委員会

ISSN 1345-9694 「史談八千代」第 30 号

発行日 平成 17 年 11 月 19 日

発行者 八千代市郷土歴史研究会

会長 村田一男

事務局 牧野光男方

〒276-0023 千葉県八千代市勝田台 3-24-10

連絡先 Tel & Fax 047-484-9728 (蔵)

E-mail. QWR07752@nifty.ne.jp

取扱店 千葉県立中央博物館内ミュージアムショップ

043-265-3111

藤春書房 (八千代台西 1-4) 047-482-4632

大杉書店 (緑ヶ丘 1-1104-3) 047-458-7808

(有)文永堂 (大和田新田 59-34) 047-459-5839